

戦後初期国語科サブカルチャーに関する調査研究

— 副読本・参考書等を中心に —

吉田 裕久

(2010年10月7日受理)

A Study on the Supplementary Reader in the Early Postwar Years
— In case of reference book, workbook, guidebook, juvenile-literature —

Hirohisa Yoshida

Abstract: I researched at The Prange Collection (Maryland University) 13 times for clearing of the Japanese sub-reader publishing after the World War II. I have made a booklist; author, title, date, publisher, for every materials. Sub-reader is, a reference book, a workbook, a guidebook, juvenile literature, self-study book (note). The Prange Collection has too many books, what are not owned by Japanese library. These books are handed in for censored by G2 of GHQ.

Key words: The Prange Collection, Japanese sub-reader, reference book, workbook, guidebook

キーワード：ブランゲ文庫、副読本、参考書・ワークブック・ガイドブック

はじめに

1. 研究開始当初の背景

戦後初期における児童・生徒用の副読本・参考書等の出版状況については、これまで、この時期が国定教科書の発行さえ用紙不足で新聞紙を流用して発行されるという悲惨な状況であり、したがって極めて貧しい状態であったという指摘がなされてきた。このことを証左するように、当時の代表的な、しかし数少ない教師向けの月刊教育誌「国民教育」・「日本教育」（ともに国民教育図書）等では、その状況を補足するため、教師向けに補充教材を提供していた。そして、それが教師として、大人として当時できうる精一杯の努力であった。こうした受けとめが一般的であった。それもそのはず、国内の図書館等には、それ以上の実態を知りうる資料が欠落していたからである。

ところが、アメリカのメリーランド大学ホーンベイク図書館（平成20年1月まではマッケルデン図書館）にあるブランゲ文庫には、日本ではほとんど所蔵が確

認されていないこれら副読本・参考書等の資料群が大量に保存されていることが判明した。本稿は、この保存状況を明らかにすることによって、そこから、これらの資料をサブカルチャーとしてとらえ、学習者の学習をどのように質的・量的に支えたのかを明らかにすることができるのではないかと思い、着手したものである。

2. 研究の目的

戦後初期の国語学習の実態を解明するために、占領期間の検閲資料を集中的に所蔵しているブランゲ文庫（アメリカ合衆国メリーランド大学ホーンベイク図書館）における国語副読本、国語参考書、国語問題集等の目録作成およびその解説を施すことを中心にして、次のことを実施する。

(1) ブランゲ文庫所蔵資料を中心に国内資料も合わせて、戦後初期国語副読本・学習参考書等に関する目録を作成する。

(2) 戦後初期国語副読本、学習参考書等と当時の国定

国語教科書・検定国語教科書とを比較することによって、その実態・特色、及び位置づけ・意義について明らかにする。

(3) 戦後初期国語副読本、学習参考書等に関する調査・分析を通して、これら国語副読本・学習参考書等が戦後まもなくの国語学習にどのような役割を果たしたのかということについて明らかにする。

本稿は、このうち、これらの基礎をなす、ブランゲ文庫所蔵資料の実態を明らかにし、戦後初期国語副読本・学習参考書等の様相を明らかにすることを中心にする。

3. 研究の方法

(1) ブランゲ文庫所蔵の国語副読本、学習参考書、および教師用指導書も含めて、その全容をつかむために現地調査する。

(2) (1) で確認された国語副読本、学習参考書等について、国内図書館（国立国会図書館、国際児童図書館等）で、その存在の有無、利活用の方法について調査する。

(3) 国語副読本、学習参考書等を国定・検定国語教科書と比較することによって、その実態、特色、位置、意義などについて明らかにする。

(4) 国語副読本、学習参考書等について解題・解説を付す。

4. 研究成果

(1) ブランゲ文庫の実地調査

①平成11年10月、②12年8月、③13年12月、④14年9月、⑤15年2月、⑥15年9月、⑦16年3月、⑧16年9月、⑨16年12月、⑩18年9月、⑪19年3月、⑫20年1月、⑬同9月の合計13回、ブランゲ文庫に実地調査した。国語教科書、国語副読本、国語参考書、国語問題集、教師用指導書等について、その表紙・目次、奥付、それに内容の一部を複写依頼し、またデジタルカメラで撮影した。

こうした「副読本」をどの範囲に限るかということ自体もなかなか難解であった。というのも、ブランゲ文庫の書庫を見て、いわゆる副読本に該当すると思われるその対象の量の多さに圧倒されたからである。これを一括して副教材、副読本と呼ぶには概括過ぎる、領域ごとに分類しなければならないと思った。小学校が2棚、中学校が6棚、高等学校が6棚、それに教師用が1棚、合計15棚もあり、概数にして1,500冊に及ぶと思われた。国語関係のものに限ってでもある。全教科に挙げれば、さらに膨大な量となる。

(2) 文献リストの作成

これを1冊ずつ、「筆者・編集者、書名、発行所、発行年月日、総ページ数」の項目でリスト化した。まず小学校、次に中学校、そして高等学校、最後に教師用参考書へと拡大していった。

したがって、まずは学校群を

小学校

中学校

高等学校と分け、

そして教師用を別立てした。

これは、ブランゲ文庫の分類もそうになっていたからである。しかし、ブランゲ文庫にはその下位分類はなく、言わば順不同で配架されていた。私の調査は、「他日見ることができること」、「他の人も見ることができること」という原則を立て、これに従って、目録を作成し、『ブランゲ文庫における戦後初期国語副読本の実態および特色に関する調査研究』（平成13年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書）→資料1として一応完成させ、報告した。

いまその下位項目を示すと、

①国語教科書

②国語参考書、国語問題集等

国語自習書、国語独習書、国語学習書、国語ワークブック、国語の手引き、国語ハンドブック、国語ドリル、国語練習帳、練習ノート、国語テスト、古典の解説・解釈・鑑賞・詳解・校注

③国語副読本

国語副読本に類似のもの

学年が指定・想定されている児童文学、児童読み物等

④教師用参考書、国語辞典等

つまり、大きくいうと、

○国語教科書および教科書に直接付随しているもの（問題集、学習参考書、ワークブック等）、

○国語教科書から独立したもの（副読本、児童読み物）に分類できた。

これら1冊ごとに、前述のように、著者・編集者、書名、発行所、発行年月日、総ページ数を調べ、文献リストを作成した。

なお、この間、本調査・本作業と平行して、メリーランド大学図書館によって教育図書目録（『メリーランド大学図書館ゴードン W. ブランゲ文庫所蔵教育関係図書目録』、2007.1）が作成されたり、日本各地（東京・広島・大阪・沖縄等）へ資料の一部が貸し出されたり、国立国会図書館によってこれらの資料の一部デジタル化（児童文学）のプロジェクトが進行したりした。こうした各方面からのこれらの資料に対する着目は、これらの資料が、戦後初期のサブカルチャーとし

て、また教育（とりわけ国語学習）の周辺資料として資料性が高いことを奇しくも物語っていると見て良からう。

(3) 国語副読本の編集・発行

時期的に言えば、戦後間もなく、そして昭和21年の段階で早くも問題集、学習参考書、副読本等が精力的に編集・発行されている。中には時代を反映してガリ版印刷のものも見られる。その一方で、格段に美しいカラー版として発行された児童書も多く目立っている。文部省から発行された暫定教科書（昭和21年）・国定教科書（同22年）でさえ、単色中心の粗末な造本であるのに比して、このカラーで満ちた豪華さはまさに目を見張るほどである。ことさらこの傾向は、児童文学において顕著である。

(4) 国語教科書

量は少ないながら、国定国語教科書（国定第六期小学校国語教科書『国語』（通称「みんないいこ」）、『まことさんはなこさん』、『いなかのいちにち』『中等国語』、『高等国語』など）がプランゲ文庫に所蔵されている。そしてCCD（民間検閲支隊）の印、及び表紙に番号が振られているものがある。ただし、内容的には何も書きいれ等はなく、検討・検閲の跡は何もない。しかし、CIE（民間情報教育局）で検閲済みのものが、なぜCCDに提出されたのか。この間の事情は分からない。

(5) 副読本・児童文学

①全国版

副読本、とりわけ児童文学、総じて児童読み物の編集・発行には、児童文学作家（坪田譲治・浜田広介・平塚武二・関英雄・村岡花子・二反長半）や国語教育界のリーダー（石森延男・垣内松三・西原慶一・田中豊太郎）、国語教育の実践家（飛田多喜雄・泉節二）が積極的にかかわり、これらの質を高めることに貢献しているように思える。子どもの教養・教育を支える出版文化は、この貧困の時代状況にあっても、こうして堅実・健全であったと言える。

例えば、次のような児童文学が、この時期に出版されている。

- ・大木雄二『一年の童話』、昭23、河津書店→資料4
- ・『新日本児童読本』（1年～6年）、昭22、新日本児童研究会→資料5
- ・谷村能男『児童読本』、昭22、奈良文庫→資料6
- ・『つばさとくほん ぼちたま』、昭22、東北図書他→資料7

「つばさ読本」は、ぼち・たま、はこにわ、とんびと白、カールのこと、ガリバー旅行記、美しき水の流れ、あふれる水、スポーツの道、スイスの旅として、小学1年生～中学3年生まで。東北教育図書ほか同一内容で、他の地域版もある。

- ・柴山義雄『一年生の童話読本』、須磨書房→資料8
 - ・新日本児童研究会『新日本児童読本』（1年～6年）→資料9～11
 - ・大木雄二『三年の童話』、昭23、河津書店→資料12
 - ・谷村能男『青い家』、昭22、奈良文庫→資料13
 - ・篠原重利監修『副読本（四年生～六年生）』、昭22、児童文化研究会→資料14～16
 - ・読本研究会『コドモノホン ーネン』（上・下）昭和21、国民図書刊行会→資料17～20
- この他、
- ・児童文学者協会（坪田穰治）『文学読本』（小学1年生～小学6年生）、昭24、河出書房
 - ・村岡花子『二年生の童話』他、昭24、美和書房
 - ・平塚武二『新せん三年の童話』
 - ・家の光少年少女文庫、昭23・24
 - ・銀の鈴文庫、
 - ・小学生文庫、昭23、美和書房
 - ・6・3文庫、昭23・24、季節社
- 等、多種・多量の副読本が刊行されている。

そして、副読本（全国版）には、次のようなものも見られる。

- ・西原慶一『一年生の副読本』、石森延男『二年生の副読本』、田中豊太郎『三年生の副読本』、昭21、新文化社
- ・日本新教育研究会（高橋誠一郎）『こくご三』他、昭23、学校図書

②地方版

こうして副読本は、全国版として発行されるとともに、地域、県単位での地方版も発行されている。この地方版の刊行も、この当時の一つの特徴かと思われる。

例えば、次のような地方版の副読本がこの時期、出版されている。「地方の児童文学」の先駆けとあって良い。この時期に、編集・発行の実務は大変であったことが予想される。それを超えての刊行は、まさに驚嘆に値する。中でも、鳥取県教職員組合から刊行された「二年の国語」（六年生版まで）→資料21～27は、注目される。いま「五年の国語」（昭23.8.10）→資料24の目次を書き出すと、次のようになっている。

- 1 村をのぼれば
- 2 金のまど
- 3 こどもとことば
- 4 えだまめこぎ

- 5 いっぴきの魚
- 6 空
- 7 魚の愛情
- 8 劇のけいこ
- 9 あらし
- 10 いいにくいことば
- 11 温せんの研きゅう
- 12 ふんすい
- 13 青麦
- 14 青いかき
- 15 おそうじの日記
- 16 帰り道
- 17 おばけ大根
- 18 じいさんとます
- 19 ローマ字のおべんきょう

時代を反映するもの、ローカルなものなど、非常に充実した内容になっている。

こうして見たとき、児童文学と副読本とはその境界(分類)が困難である。児童文学の中にも「小学〇年生用」などと表記されたものがあり、副読本との区別が難しい。分類することに意味があるのではなく、子どもの読み物としてどのような出版物があったのかという視点から、現時点では両者を区別することなく含めて捉えるべきかと考えている。

(6) 教科書準拠の参考書・問題集等

教科書準拠の学習参考書・問題集等は、これまた想像以上に多く(多種多様)の種類が発行されている。しかし内容的には類似のものも多く、競うようにして出版した形跡も感じられる。

①小学校の参考書

- ・石黒修『わたしたちのことば』、→資料28
- ・『新しい教科書による国語学習帳』、→資料29
- ・『まことさんはなこさん』資料30~32
- ・『太郎花子国語の本 学習指導書 ひばりのうた 2 年上』、昭24、日本書籍、資料33
- ・『国語学習帳』、信濃教育会、→資料34
- ・新教育研究会『小学三年国語参考書』他、昭22、新教育会
- ・『初等科国語学習書』(第四学年中巻)他、教育同人社、ガリ版印刷
- ・池田龍太郎『新しい国語参考書 五年用』他、昭21、平和出版社
- ・学友社編集部『五年の国語学習の研究』他、昭22、学友社
- ・小学教育研究会『国語新研究四年』他、昭24、新協出版社

- ・伊藤伝吉『小学校の国語四年上』他、昭23、新泉社

②小学校の学習書・自習書

- ・池内房吉・山田耕平『優等生の新編模範国語四年』他、昭23、新興出版社
- ・教学研究社編集部『予習・復習・新考査国語模範学習書四年』他、昭22、教学研究社、→資料35
- ・新教材研究会『文部省新制定による五年の国語学習書』他、昭23、有文堂
- ・国語文化教育会『家庭で力のつく小学生国語自習書第五学年用』、昭22、秋栄書房
- ・国語文化教育会『自由に学びの力がつく小学生の国語五年前期』、昭23、秋栄書房
- ・国語文化教育会『分かり易く力のつく小学生の国語第五学年中』、昭22、秋栄書房
- ・伊藤伝吉『小学生の国語自習書四年中』他、昭23、清水書院
- ・国民図書刊行会『国語の自習五年前期』他、昭23
- ・新日本教育研究会『小学校国語自習書第四学年上』他、昭22、誠和書院
- ・小学教材研究会『国語学習書四年中』他、昭22、文英堂
- ・東京国語教育研究会『新しい国語のワークブック第五学年中』他、昭24、文進堂
- ・学進書房『国語の手びき 第五学年上』、昭23、学進書房、→資料36
- ・興水実・小島忠治『国語のワークブック第五学年上』、昭23、国語文化学会、→資料37

③小学校の学習の手引き

- ・京都市国語教育研究会『国語学習の手引第五学年中』他、昭23、日の本教材社、→資料38
- ・興文社編集部『国民六年生 自習の友』、昭22、→資料39
- ・学友社編集部『国語学習の手びき 初等科国語八』他、→資料40
- ・東京国語教育研究所『国語ハンドブック六年上』、昭23、児童教育研究会、→資料41

これらの中から、学習指導研究会(東京第二師範女子部附属小学校内)『学習の手びき四年前期用』の「まえがき」(みなさんへ この本のつかい方)の一部を引いてみる。

1、「この課の学びかた」では、○この課のねらいどころ、○どうべんきょうすればよいか、○自由けんきゅうの手がかり、などについて力をかしてくるでしょう。

2、「文字の読み」は、あたらしいかん字、読みにくいかん字の読みかたをしめしてあります。

3、「ことばのけんきゅう」は、むずかしいこと

ばのいみ、やさしいことでも文のなかでだいじなところを、せつめいしてあります。

4、「れんしゅう」は、この課を学習して、なかが、よくわかったかどうか、自分でためしてみるのは。そして、はじめにいった国語の四つの力をのばしていくことです。

5、「さんこう」は、その課についてたいせつな話をのせてありますから、自由けんきゅうをするのにやくだててください。

6、「父兄の方へ」は、みなさんのおとうさん、おかあさんに読んでいただきたいと思います。

このほかに「テスト」がついています。これによって、自分の力をためして、よいところはのばし、たりないところは、いっそうはげんでください。

こうして、参考書・問題集は教科書準拠のものが多く見られる。国定教科書・検定教科書の予習・復習など、日常の学習にそのまま使えるものとして編集されている。ただ、この参考書・問題集は、教科書準拠ということもあってか、構造・内容が極めて近似しており、多くが、解題、語句解説、学習の手引きなどとなっている。

そして、その影響か、それらの書名が、次第に競うように、「楽しく学べる」「新しい学び方」「一番わかりやすい」「必ず力のつく」「優等生の」など、大げさな書名になっていったようである。

④中・高等学校の副読本・参考書・問題集

こうして国語副読本・参考書・問題集の発行は小学校向けものが圧倒的に多いのであるが、中・高等学校向けのものも、当時の出版事情に照らしてみると、決して少なくない。中学校—132冊、高等学校—490冊を数えている。そして、どちらかという、中学校は教科書準拠の解説・問題集が中心で、高等学校は日本文学史、古典作品別（源氏物語・枕草子・徒然草等）解釈、国文法解説など、やや一般的な解説・研究書が中心になっている。そして、これも小学校で指摘したと同様に、その大きな特色として、類書の多さが目立っている。

⑤中学校

まず中学校用のものを抽出してみる。

- ・鳥取県教職員『国語副読本中学校一年用』他、昭23、→資料26～27
- ・学生の友社編集部『たのしくまなべる私の国語新制中学一年用』、昭22、学生の友社、→資料42
- ・学習指導研究会『三年の国語』他、昭23、革新社、資料43
- ・大木信夫『一番わかりやすい私たちの国語一年下』他、昭24、新興出版社、→資料44

- ・国語教育研究所『学習資料 中等国語一』、昭24、開成館、→資料45
- ・国語研究会『私たちの国語 学習書』、昭24、友学社、→資料46
- ・国語研究会『私たちの国語 自習書』、昭24、友学社、→資料47
- ・学修研究会『新制中学校中等国語の独習一年用』他、昭22
- ・清水書院編集部『新制中学校中等国語自習書第一学年用』他、昭22、清水書院
- ・自修書房編集部『新制中学校用「中等国語」精解国語自習書第一学年用』他、昭23、自修書房
- ・中等国語研究会『新制中学一年国語模範自習書』他、昭23、中教社
- ・教育文化研究会『ドリル式中学一年の国語第一学期用』、昭23、教育文化研究会
- ・三木秀作『workbook 文部省中等国語一』他、昭23、奈良文庫
- ・中等教育研究会『新しい効果判定法による中等国語練習帳』、昭24、東書房
- ・文部省内国語教育研究会『中等国語学び方第一学年用全』他、昭24、日本教科書株式会社
- ・奥水・飛田他『中等国語学習の手引解説第一学年用』他、昭23、国語文化学会
- ・広島高等師範附属中等国語研究会『中等国語の正しい研究一学年用1の2』、昭23、修文館

これらの中から、その一例として、新日本辞書出版社編集部『中等国語一の2 独習書』（昭22、新日本辞書出版社）→資料48の「はしがき・この本での勉強のしかた」を引いてみる。

〔はしがき〕

日本は新しく生まれ変わった。新しい憲法ができた。新しい教育制度が実施された。そして、学校の教科目も変わった。社会科のような新しい教科もできた。

そして、最もいちじるしい変り方をした学科のひとつは国語であろう。当用漢字が制定されて漢字の数がずっとへり、その使い方が改められた。さらに現代かなづかいがおこなわれて、普通に書かれた文章は、今までとずっと変わった外見をとることになった。外形ばかりでなく、内容も違って、古典などはずっとすくなくなった。

その新しい国語をどう学んだらいいか。国語の学び方も当然新しくならなければならない。従来の古い型の学習書は「虎の巻」によって、むずかしい漢字や語句の単なる解釈を見て、すましてはならない。

この本は、この新しい国語に即して、正しい学習

の助けとなり、導きをするように書かれたものである。国語の力を十分につけることができるようにあまれた本である。国語学習の指導書、参考書として、これをよく活用し、その力をのばして、りっぱな成績をあげてほしい。

〔この本で勉強のしかた〕

この本は、はしがきにもある通り、新しい国語の学習指導書として書かれたものであるから、単にむずかしい字句の説明ばかりでなく、いろいろのことがあげてある。

教科書の本文を、内容によっていくつかの段落をわけ、それに「注意」をつけてある。古典、その他特別なものには、さらに「通釈」をそえた。詩歌については、「大意」をつけた。

各課の終りには、編著者、編著に関する説明、その課の「要旨」、「教材」の様式、文章、「内容」と段落、それに「学習指導」の各項がそえてある。

勉強には、なんとといっても、まず本文をよく読んでみることが大切である。はじめから「注意」にたよってはならない。それから「注意」には、少し程度の高いことも述べてあるから、必ずしも全部を覚える必要はない。

各課の終りにつけてあるいろいろのことは、すくなくとも復習の折には、ぜひ読んで、これを学習してもらいたいと思う。

中学校の参考書・問題集は、かなり定式化していて、教科書本文・注意・通釈・大意・要旨・学習の手引きの解答例などとなっている。今日のいわゆる学習ガイドに近いものになっている。「虎の巻」という呼称も見られている。

⑥高等学校の参考書・問題集

高等学校の参考書・問題集は、小・中学校と同様に、教科書ガイド的なものと、いわゆる大学受験用のもの、さらには古典（古文・漢文）に顕著な注釈書（現代語訳・解説）の三者が認められる。

教科書ガイド的なものとしては、

- ・清水書院編集部『高等国語自習書一下』他、昭22、清水書院
- ・新日本教育研究会『高等国語詳解』、昭23、誠和書院
- ・浅尾芳之助『ひとりで学べる新制の国文法文語篇』他、昭21、など、

かなりの数が発行されている。

また、大学受験用としては、

- ・保坂弘司『現代文の新研究』、学燈社
- ・末政寂仙『学修受験現代文解釈法』、昭22、学修社
- ・森本種次郎『学修指針受験の要諦 現代文精粹』、昭22、大阪隆文堂

・山海堂編集部『大学入試実力養成国語問題集3』など、これまた多くが所蔵されている。どんな環境にあっても、大学入試は大きな課題であったようである。

さらに、古文・漢文の注釈書としては、

- ・中等国語研究会『抄本徒然草』・『抄本方丈記』、昭23、健文館
- ・高等教育研究会『新制高等学校用つれづれ草選』、昭24、高等教育研究会
- ・塚本哲三『基本漢文解釈法』、昭22、友朋堂
- ・清水書院編集部『高等漢文自習書第一学年用』他、昭23、清水書院

『校注』『抄本』『選』などの形で、万葉集（上古）から西鶴（近世）に至るまで、精力的に出版されている。

⑦教師用指導書

単行本の内容上の特徴として、新教育を展開する意気込みが感じられるものが多く、開発・新生の進取の気風の中で、教育への情熱、子どもへの期待が熱く伝わってくる。混沌としたり・スタートの中から、教育の原点、教育の普遍性を再思させられる。

- ・篠原利逸『新しい国語教育の方向』、昭24、健文社
- ・文部省国語教育研究会『小学校国語学習の手引き』（第2学年用～第6学年用）、昭24、時事通信社
- ・吉田瑞穂『国語の学び方』、昭23、伎報堂など、これらについては、今日でも大学の図書館等でも見ることが多い著書である。

(7) 所蔵状況

またこれらの資料の蔵書状況を国内の図書館（国立国会図書館・国際児童図書館・大学図書館等）で検索したところ、ほとんどのものが未所蔵であることが分かっている。

国語副読本については児童文学との境界が必ずしも明確でないこともあって、断片的にはあるが所蔵が期待できそうである。しかし、問題集・学習参考書などの所蔵は皆無に近い状況である。とりわけ後者は児童生徒の国語学習に直接影響を及ぼすサブカルチャーであるだけに、これらの検討は必須となる。

こうしたことから、国内資料だけで研究を展開した場合、これらの資料の存在に気づかず、果てはこれらの資料が無かったものとして研究することにもなりかねない。近辺に資料が見いだせない時、非存在として判断してしまう危険性がここにもあり得るのである。

おわりに

以上、プランゲ文庫では、(1) 国語教科書を中核にして、(2) 教科書教材を解説・解釈した学習参考書・

ハンドブック・学習の手引き、(3)教科書教材を問題集の形にしたワークブック・自習書、(4)その周辺を成す児童読本・読み物、さらに(5)教師用教授書、古文・漢文などは一般的な解説書・研究書として発行されたものも大量に所蔵している。本報告では、これらを合わせて「副読本」として認定している。国定教科書の発行さえまならなかった戦後初期に、こうした児童文学・副読本が多種・大量に発行されていたということ自体、すでに驚きであるが、内容の面から見ても充実したものになっていて、当時の教育関係者の並々ならぬ努力の跡がうかがわれる。

そして、国内の図書館等においては、これらのうち単行本の所蔵は散見されるが、ここで重点的に調査した国語副読本、学習参考書、問題集の類は、国立国会図書館・国立政策教育研究所教育図書館を初め、殆ど所蔵されていない貴重な資料群であることが分かった。

紙不足の時代と言われ、教科書の発行さえ危ぶまれながら、サブカルチャーとしての副読本、参考書、問題集の類は、多種・大量に編集・発行されている。この現象について、子どもへの大人の責任の反映と受けとめるべきか、それともいかなる時代にも存在する商業主義（商魂たくましい）と受けとめるべきか。

さらに、経済的に逼迫した時代にあって、これらが実際にどのように利用されたかについてはこれからの課題である。

【付 記】

なお、本稿に関連するものとして、以下のシンポジウム、報告書がある。

○シンポジウム

本研究に深く関わるものとして、平成19年8月6日、九州大学（西新プラザ大会議室）で開催されたシンポジウム（被占領下の国語教育と文学—ブランゲ文庫所蔵資料から）がある。筆者はシンポジストの一人として「ブランゲ文庫資料から見える戦後初期国語教育—国語教科書・副読本の実態と特色—」を研究発表した。

○報告書

その報告書として、2007年ブランゲ文庫福岡シンポジウム記録出版実行委員会（代表：横手一彦）『シンポジウム 被占領下の国語教育と文学—ブランゲ文庫所蔵資料から—』（平成21年4月29日、メリーランド大学図書館ゴードン・W・ブランゲ文庫）が刊行された。

同書に、吉田裕久「ブランゲ文庫資料から見える戦後初期国語教育—国語教科書・副読本の実態と特色—」（pp.54～60）が、収録されている。

○副読本・児童文学



4



3



2



1



8



7



6



5



12



11



10



9



16



15



14



13



20



19



18



17

○副読本・参考書・ワークブック（小学校）



24



23



22



21



28



27



26



25



32



31



30



29



36



35



34



33



40



39



38



37

○副読本・参考書・ワークブック（中学校・高等学校），教師用指導書



44



43



42



41



48



47



46



45



52



51



50



49



55



54



53